様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 １４ 日現在

機関番号：１２６０６
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2018
課題番号：１６Ｋ０２２３３

研究課題名（和文）地歌における上方と江戸の文化交流－「芝居歌物」と「浄瑠璃物」を中心に

研究課題名（英文）Study on the Cultural exchange between Kansai and Edo in Jiuta

研究代表者
野川　美穂子（NOGAWA, Mihoko）

東京藝術大学・音楽学部・講師

研究者番号：５０２１８２９４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,200,000円

研究成果の概要（和文）：地歌は、上方で生まれ、上方を中心に発展した三味線音楽である。地歌の専門家である盲人音楽家の作品に加え、上方や江戸の歌舞伎や浄瑠璃の劇場で上演された人気演目に関連する作品も含む。いっぽうで、地歌は江戸にも伝わり、江戸の文化にも影響を与えた。本研究では、地歌の貴重な曲種である「芝居歌物」と「浄瑠璃物」に焦点をあて、地歌の歌本や譜本、『歌系図』（1782）に記される地歌側の情報と歌舞伎・浄瑠璃側の資料を収集して調査した。それらを照合して、地歌と歌舞伎・浄瑠璃との交流、上方と江戸の文化の交流の歴史と作品研究を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義
地歌の曲種研究は、「三味線組歌」を対象とする国文学的研究や「手事物」に対する音楽学的研究が中心で、遅れている。申請者は、曲種成立の歴史と「浄瑠璃物」と「作物」に焦点をあてた研究を行ってきたが、本研究では「浄瑠璃物」の研究をさらに推し進め、「芝居歌物」にも調査対象を広げた。「浄瑠璃物」と「芝居歌物」の研究は、地歌の研究であると同時に、廃絶した繁太夫節や半太夫節などの浄瑠璃の研究、長唄の研究、歌舞伎や人形浄瑠璃の研究にもつながる。上方と江戸のさまざまな音楽が互いに関連を持ちながら発展した状況を具体的に解明できる研究として意義がある。

研究成果の概要（英文）：Jiuta is a shamisen music that was born and developed in the Kansai area. In addition to works by blind musicians who were specialists in Jiuta, it also includes works related to the music of Kabuki theatre and puppet theatre in Kansai and Edo. On the other hand, Jiuta was also transmitted to Edo and influenced the culture of Edo. In this research, I focused on “Shibaiutamono” and “Jorurimono”, which are the important repertoire of Jiuta, and collected historical materials of Jiuta, such as song books, musical notes, and checked Utakeizu (1782). Similarly, the materials of Kabuki and Joruri were collected. By collating them, I studied the history and works of the interaction between Jiuta and Kabuki and Joruri, and the cultural exchange between Kansai and Edo.

研究分野：人文学

キーワード：日本音楽　地歌　浄瑠璃　芝居歌

１．研究開始当初の背景

地歌には、「三味線組歌」「長歌物」「端歌物」「作物」「浄瑠璃物」「作物」「手事物」「謡い物」「芝居歌物」など、多様な曲種がある。作品成立の背景、歌詞の文学的特徴、音楽的特徴などに基づく分類で、その曲種名は、江戸時代以来、歌本（歌詞集）や譜本（楽譜集）に記載され、作曲、演奏、教習などの場で積極的に活用されてきた。地歌の歴史そのものを物語るが、十分な研究は進んでいない。野川は、2005 年に「地歌における曲種の生成」と題する博士論文で学位を取得し、その研究を発展させた『地歌における曲種の生成』（第一書房、2006 年）を出版した。同書では、江戸時代の歌本や譜本類を資料に、曲種分類の誕生と変遷の過程を整理して、曲種研究の出発点となる成果を提供できたが、曲種の特徴と個々の作品の分析には至らなかった。そのため、次の段階の研究では、「浄瑠璃物」の下位分類である「繁太夫物」に焦点をあて、代表作品の歴史と音楽の分析を行った（野川美穂子「地歌の繁太夫物の特徴－旋律型を中心に－」『三味線音楽の旋律型研究－町田佳聲をめぐって』、京都市立芸大、2015 年）。本研究では、さらなる段階として、「芝居歌物」と「浄瑠璃物」に焦点をあて、成立事情の解明と作品の分析を行いたいと考えた。「芝居歌物」と「浄瑠璃物」は、地歌の曲種でありながら、上方および江戸の浄瑠璃や歌舞伎で演奏された作品との関連を持つ。上方と江戸の文化交流の解明につながると考えた。

２．研究の目的

江戸時代の地歌は、三味線が伝来した大坂の堺を出発点に、上方文化として発展した。盲人音楽家の作品に加え、上方の歌舞伎や浄瑠璃と関連する作品を含んでいる。座敷や遊里の音楽として楽しまれたため、江戸の歌舞伎や浄瑠璃で用いられた人気曲も、貪欲にレパートリーに取り入れた。それらは「芝居歌物」「浄瑠璃物」などと分類され、地歌の貴重な曲種となっている。現在に伝えられていない歌舞伎や浄瑠璃と関連する作品も含む。いっぽうで、地歌は江戸にも伝えられた。上方から江戸に下った歌舞伎関係者などの働きにより、江戸の歌舞伎芝居に使われ、長唄を代表とする江戸の三味線音楽に移曲された。上方の地歌と江戸の長唄の楽曲が交流した具体的な証拠となっている。また、山田検校が江戸で創始した山田流箏曲にも影響を与えた。本研究では、研究が遅れている「芝居歌物」と「浄瑠璃物」を中心に、種目と地域を横断する視点で、歴史研究と作品分析を行う。地歌と歌舞伎・浄瑠璃との作品交流、上方と江戸の文化交流の一端を解明することを目的とした。

３．研究の方法

研究方法の基本は、文献調査と作品分析である。具体的には、（１）「芝居歌物」「浄瑠璃物」に関する地歌側の資料（歌本、譜本など）の収集と整理、（２）地歌の「芝居歌物」「浄瑠璃物」に関する歌舞伎・浄瑠璃側の資料の収集と調査、（３）上記１と２の情報の照合、（４）上方と江戸との文化交流がみられる地歌の作品分析、を主軸に行った。

４．研究成果

主な研究成果として、以下の６点が得られた。

（１）「芝居歌物」「浄瑠璃物」に関する資料収集と調査

「芝居歌物」と「浄瑠璃物」に該当する作品の情報を整理するために、『松の葉』(1703)、『歌系図』(1782)、大坂系の『糸のしらべ』類、京都系の『糸の節』類、収録作品数の多い『歌曲時習考』類などの地歌の資料を調査した。『糸のしらべ』類、『糸の節』類、『歌曲時習考』類については、各作品の作曲年代を特定し、詞章の変遷を調査するために、年代の異なる諸本の収集を行った。そのうえで、該当する作品名と作曲・作詞者の情報を整理した一覧表を作成し、それらの情報と詞章の内容を手掛かりに、歌舞伎や浄瑠璃の資料を収集した。

（２）『歌系図』の「芝居歌物」に関する研究

「芝居歌物」の分類は、江戸時代の文献では『歌系図』（1782）にのみ指摘できる。「芝居歌物」の基礎資料と言えるのが『歌系図』である。『歌系図』の「三下り之部」には「芝居哥」として 26 曲、「二上り之部」には「しはゐうた」として 28 曲が列挙されている。また、「芝居哥」「しはゐうた」という明記はないものの、「二上り之部」と「三下り之部」の列挙方法との類似から、「本調子之部」の 15 曲も「芝居歌物」とみなし得る。以上の計 69 曲について、作曲・作詞者の情報の整理、現行曲の確認、江戸期の歌本類や明治以降の研究者による曲種分類との比較を行った。確定はできないが、特定の派にのみ伝承される作品も数えると、69 曲のうち 34 曲が現行する。江戸期の歌本類との比較からは、「一中節」「謡い物」「永閑節」「数え歌」「祭文」「作物」「繁太夫物」「長歌物」「端歌物」「半太夫物」に分類される作品が含まれていた。明治以降の研究者による分類としては、20 曲を「芝居歌物」の作品名として列挙する中井猛の分類などとの比較を行い、「芝居歌物」の該当作品に関する見解の異同を考察した。

（３）『琴曲　松のみばえ』（1782）に収録される芝居歌物に関する研究

『琴曲　松のみばえ』（1782）は、広く知られる『琴曲　松のみばえ』（1757）とは異なる地歌の歌本で、その存在を初めて紹介したのは、野川による「地歌と地歌以外の三味線音楽との楽曲交流に関する研究」（平成 23～25 年度科学研究費補助金（基盤研究(C)）課題番号 23520161）である。本研究では、『琴曲　松のみばえ』の収録曲につき、『歌系図』の「芝居歌物」との比較を行った。全 47 曲のうち 19 曲が『歌系図』の「芝居歌物」であること、そのなかには『琴曲　松のみばえ』では「長うた」と分類する曲を含むことを明らかにし、19 曲の詞章を『歌曲時習考』類と比較した。

（４）「芝居歌物」「浄瑠璃物」の演奏資料の収集と音源のデジタル化

作品分析の資料となる演奏資料を収集し、LP などの音源についてはデジタル化した。

（５）地歌《越後獅子》と《江戸土産》に関する研究

大坂の盲人音楽家である峰崎勾当が作曲した《越後獅子》は、「手事物」に分類される作品であるが、1811 年に江戸の中村座で初演された七変化舞踊《遅桜手爾葉七字》の一曲、長唄《越後獅子》に影響を与えた作品として知られている。いっぽう、地歌《江戸土産》は、《遅桜手爾葉七字》で好評を得た 3 代目歌右衛門が大坂に戻って上演した《慣ちょっと七化》（1813 年、大坂・中の芝居）に基づく作品である。上方と江戸との交流から生まれた二曲につき、地歌側の資料と歌舞伎側の資料を整理して考察した。地歌の音楽的特徴と直接には関連しないが、長唄《越後獅子》については、東京国立博物館所蔵「太鼓手附」に記される囃子と現行との比較も行った。

（６）芝居歌物《きぎす》の「レンボ」と上方と江戸の文化交流に関する研究

『歌系図』の「芝居歌物」の一曲である《きぎす》は、『歌系図』によれば、京都の歌舞伎の劇場を中心に活躍した嶋野勘七と若村藤四郎の作曲であり、歌舞伎役者の加茂川野塩の作詞である。音楽的には「レンボ」と呼ばれる旋律から始まる。「レンボ」は、上方文化の地歌、江戸文化の河東節、一中節、山田流箏曲、長唄などの多くの作品に使われている。「レンボ」のルーツは江戸初期の流行歌謡「れんぼ」（仮称）であり、江戸の流行歌謡を掲載する『吉原はやり小哥そうまくり』に詞章が掲載され、上方で出版された『糸竹初心集』『糸竹大全』に楽譜がある。「れんぼ」は、上方で作られた地歌の三味線組歌《飛驒組》、《六段恋慕》にも影響を与えた。上方と江戸との文化交流の一例として、「れんぼ」と「レンボ」の歴史を考察し、音楽的特徴を分析した。「れんぼ」については、『糸竹初心集』と『糸竹大全』に基づく音楽的復元も行った。江戸の山田流箏曲に与えた影響についても明らかにした。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計２件）

①野川美穂子、配川美加、吉野雪子「近世邦楽における「レンボ」の広がり」、『日本伝統音楽研究』ISSN1347－3689、査読あり、2019 年 7 月発行予定

②野川美穂子「日本音楽の中の角兵衛獅子」、『藝能』、査読なし、2018 年

〔学会発表〕（計２件）

①野川美穂子、配川美加、吉野雪子「近世邦楽における「レンボ」の広がり」、京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター主催「三味線音楽研究－町田佳聲をめぐって－」、2017 年 9 月 9 日、京都市国際交流会館第３会議室

②野川美穂子「日本音楽の中の角兵衛獅子」、藝能学会、2016 年 6 月 4 日、蕨市立文化ホールくるる

〔図書〕（計１件）

①久保田敏子、井口はる菜、野川美穂子『地歌箏曲事典』、東洋書院、2019 年 10 月発売予定、予定総頁数７００頁

６．研究組織

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。